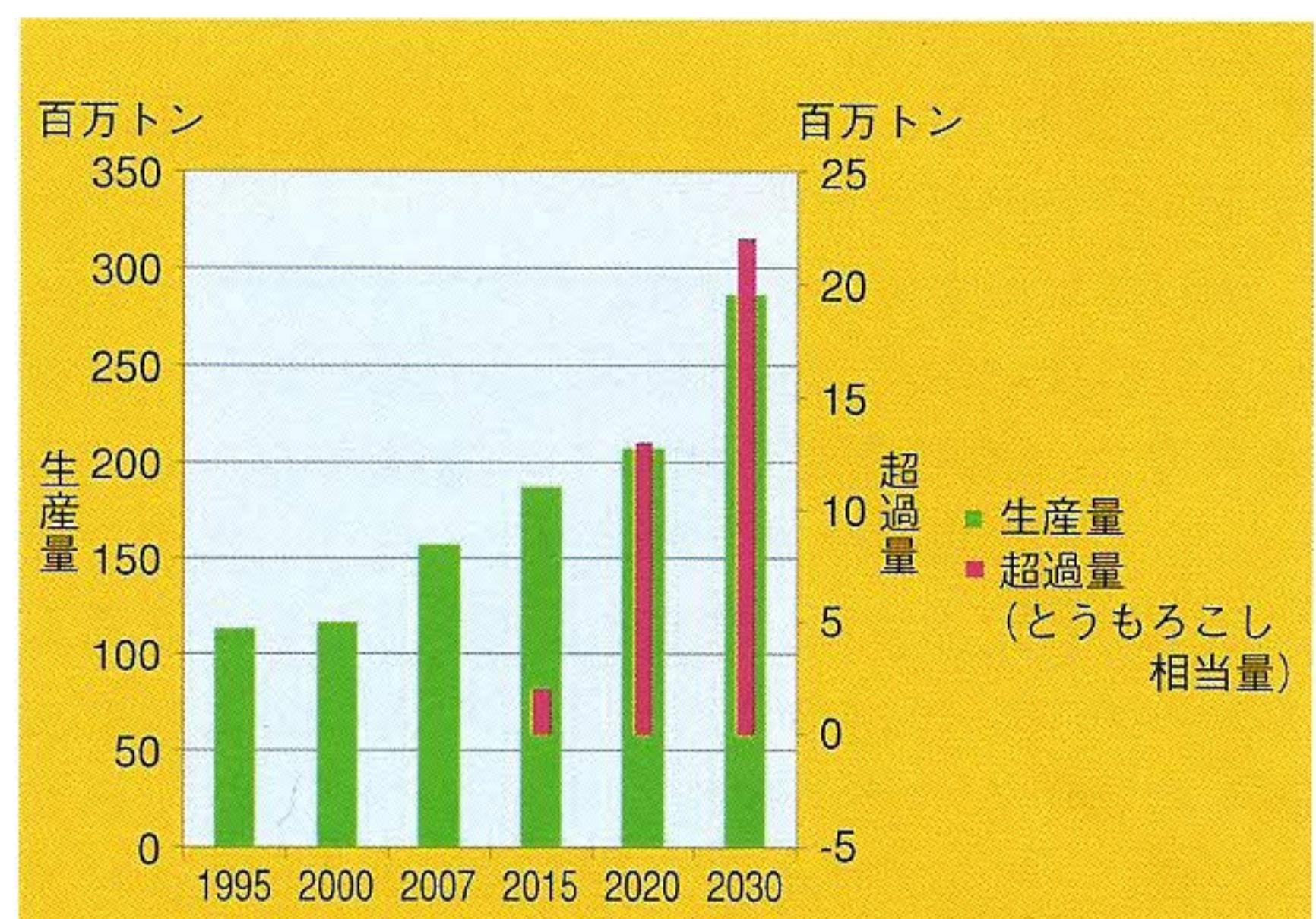


第1図 中国の水産養殖生産量と大豆輸入量の推移及び予測



第2図 中国のとうもろこし生産量及び超過量（とうもろこし相当量）の推移及び予測

る水産養殖生産の増加割合が鈍化している一方で、大豆の輸入量は、伸びが著しいのがわかります。

一方、とうもろこしについて、現状をみると、中国国内の収穫面積、総生産面積、総供給量はいずれも増加しています。また、昨年のように、とうもろこしの価格が安い時でも、それほど輸入はしていません。その理由はなぜでしょうか。1つの重要なポイントになるのが、作物残さの利用です。とうもろこしの茎葉等の作物残さの再利用については、米国ではその価値はほとんど認められていません。しかし、中国では、飼料の供給源の総量に占める作物残さの割合は、代謝エネルギー (ME) 及び粗タンパク質 (CP) で、それぞれ38%と28%に達します。さらに、今後の中国での遺伝子組換え作物の導入による収量の増加についても考慮しなければなりません。こうした要因を組み込んで、中国におけるとうもろこしの生産量ととうもろこし相当量の超過量の推移を示したのが第2図です。

ただし、これらの予測は、政府の政策や気象の変

化によって大きく変動する可能性があることにも注意が必要です。

3 日本はどう対応すべきか？

もし、あなたが、メディアで見聞きしたことを批判的に見ることができれば、中国は、すでに農業のスーパーパワーであることが理解できるでしょう。また、それに伴って、中国には、当然、世界の中で果たすべき義務が生じるはずです。これは日本にとって何を意味するのかをよく考える必要があります。今、日本では、TPPに参加するか否かが政治的にも社会的にも大きな関心事になっています。しかし、輸入関税が急速に引き下げられれば、日本は、農業・加工食品部門を失いかねない可能性もあります。G10とそのうちの一国に過ぎない日本の状況、そして日本やG10諸国も含めた諸外国に対して中国が負うべき義務は何かを、じっくりと、批判的に考えることが重要ではないでしょうか。